

初秋

Lyrics 5

泐  
言址

## 水彩

白いパレットに置かれた絵具が乾く――  
それを待って、筆をとる

透明なビニールのバケツから  
筆の毛で水を運ぶ

空は若緑を薄めた色に高く息づいている  
大気は夏を予感しているかのようにきらめいている

ひび割れた半円形の絵具が水に潤い  
次第次第に滲んでゆく

それを覗き込んで枝垂れた梢が  
息を呑んで見守っている

「色を使わないでください」  
あなたは、そういう目をしていましたね

今日はかすかな南風です  
輪郭を滲ませ、目を細めさせる陽気です

膝の上に広げた画用紙に  
僕は、そっと色水を沁ませる

ああ、あなたはいまどこにいますか？  
どこで、目を細めているのですか？

この画用紙へ染み込んでゆく午後の陽射しは  
まるであなたの澆刺とした言葉のようです

僕は今、描こうとしているのです  
私の言葉では描くことのできぬ、あなたの言葉を

(2005.5.28)

## 放浪

全てが均しく与えられることを

太陽と大気と、そして水はどうして

どのように実現してきたかを知ることは

深い畏怖に満ちた私の心を孤独に晒し

あらゆる営みを遠くへと、遥かに遠くへと流し去る

抑圧もなく

しかし開放もなく

氷の粒のような自由が

旗竿にくくり付けられたぼろ布のように

ただ、はためいている

空腹が心を鋭く磨き上げ

記憶よりも

現在——目の前にある現在こそが

野獣のような美しさで

さまよう私を導く

川を渡り

夜を過ごし

岩だらけの峠を越え

昼を過ごし

朝と、そして夕に立ち止まる

私がこれまでに身につけてきたものは

全て、これから費やされるためだけにある

死へと続くこの旅こそ

ああ、生と呼ぶべき営みの中でも

最も瑞々しいものなのだから

(2005.8.9)

## 連と語る

じっと動かぬ木の

蛍光灯に照らされた葉裏の白さ

その輝きの

発生

束の間の生

そして消失

連続

連と連との間の空白において眠る者——

あなたを捉えること

霧が降るように降る

大気

その深い洞窟の底に潜む者

黒い天空に瞬く星に何を見ることができるか

夜は既に閉じられ

明けることを

その方法を知らない

連とは何か

あなたの生を時間と結ぶもの

一段

一段

それを区切るもの

階段として

あなたの生を

生の感触を呼び覚ますもの

おお、連よ

私の前に輝くこの葉裏の白さを

私の中に降らせよ

あの夜空に瞬く星々を目覚めさせ

夜そのものを動かし

これまでで失われてきた全てのわななきを

私に注ぎ込め

(2005.10.29)

ケヤキ

日没間近の都市公園に

さらさらという音を地面にこぼしながら  
ケヤキの若木が黄金色に立っている

折からの強い風に吹かれ

時折り引きちぎられた枯葉が

地面と平行に吹き飛ばされてゆく

色褪せ

赤茶け

朽ちはじめた木のベンチが並んでいる

晩秋の夕暮れのもたらす景色を前に

僕は呆然と座っている

その時に立ち会えたことに・・・

昨日 僕は何をしたか

昨日 僕は何を想ったか



昨日 昨日 昨日

何も憶えていない

思い出せない

昨日

あのケヤキはこれから眠りに落ちるのだろうか

僕はどうするのか

これから

もし飛ばされるなら

あの雲の上がいい

まっすぐに

そして

白と青だけの単調な世界で

狂ってしまいたい

おおケヤキよ

お前は本当に眠ってしまおうのか

この僕を置いたままにして  
昨日さえ思い出せぬこの僕を置き去りにして

(2005.11.8)

## 松葉

茶色く枯れた松の葉が落ちている

こうこうと輝く月夜はさむざむとして  
僕は何を見ているのだ

ほそい ほそい 松の枯葉  
ぱらぱらと落ちている松葉

線

途切れ途切れの線

それを伝い

行き先のない渴望が  
ひそかに身悶える

落ちよ

目前びようびように渺々と広がる海原へ

やわらかに

けだるく

重たくうねる海原へ——

闇から浮き出る波頭

その白さに僕は身を投げる

線を伝い空白を飛び越え

僕は身を投げる

おお

枯れ落ちた松葉が

僕を導く

解き放たれた心が

この胸から飛び立つ

死ではなく  
別れでもなく  
この身を溶かし去るもの

おお  
孤りであることの  
大気に抱かれることの  
指し示す先

そこへ向けて  
吸い寄せられる  
そこならば  
消えてもよい

松葉が落ちている  
僕はそれを拾う

集め  
束ねる

(2005.12.6)

書簡

夕暮れの空に白い半月が出ている  
薄墨色の雲が流れてゆく  
ほんのりと紅をさした雲  
鳥たちがねぐらへと急いでいる

今年の冬は思いのほか  
寒さ厳しく・・・

昨日は娘が訪ねてきた  
今日からまたずっと長い一人暮らし  
わが家の猫は、ありがたいことに  
それを気にもしないだろう

ゆっくりと水面を流れる葉が

ひととき水底の石を隠すように  
雲が空を流れ

月をひととき隠してはまた流れてゆく

今年の冬は昔のように

寒さ厳しく・・・

こんなにも長く空を眺めていること――

そのことが今の私の

紛れもない私の生

月がまた現れている

猫は布団の上で丸く眠りについた

あつという間の六十年

私はその証を求めない

私であったことを求めない

明日もまた

静かな一日と・・・

夜が近づいている――  
眠りにつくことをためらうのは  
明日が今日と変わりにないことを  
知っているがため

あなたに宛てて  
この書簡をしたためるのは  
明日が今日と変わりにないことを  
知っているがため

遠くに見える  
今がある

(2006.1.9)

## 港内

かつて黒い水がよどんでいた港は  
透明な翡翠色の水を湛えている

一羽の白鳥と、数羽のコガモ  
そして釣り糸を垂れる者

穏やかな波長のうねりが  
港全体を包み込んでいる

時折急ぐタグボートの航跡とて  
穏やかなうねりに宥められてしまう

海は、湖でも川でもない  
その広さ、そして深さ、豊かさ——

岸壁に佇むと、感じられる  
魚たちが水中で翻り、騒ぐのが・・・

かつては鼻をつく刺激臭があった空気も  
軽い潮の香りだけが風に漂っている

それにもかかわらず



私は得体の知れぬ胸苦しきをおぼえる

この翡翠色の水のずっと底に眠る復讐の企み  
この穏やかな波長のうねりが時折競り上がる様

じりじりと牙を剥きはじめるかもしれぬ  
じりじりと呑み込もうとしているかもしれぬ

ひた、ひた、と静かに音をたてて  
港内は穏やかにたゆたっている

(2006.12.18)

## 戸棚

一つ目の扉を開けると  
皿が重ねてある

二つ目の扉を開けると

グラスが並べてある

三つ目の扉を開けると  
深皿が重ねてある

四つ目の扉を開けると  
カップが並べてある

五つ目の扉を開けると  
紅茶やコーヒーがある

六つ目の扉を開けると  
スパイスなどがある

七つ目の扉を開けると  
あなたの写真がある

(2007.1.9)

## 部屋

冴え冴えとした月あかりの  
スレート屋根に沁み込む

蛍光灯のあかりの

ツゲの葉裏をしろく浮き出す

劣化したプラスチックの  
ざらりとした肌触り

滴る光の

霧

享けるもの

わたしがそれになる

雑音が遥か遠くに薄れてゆく  
ひと呼吸ごとに

完成された孤独を  
静かに繭を、編む

何者も手の届かぬ

白い砂底から湧き出る泉

私は手を伸ばさない

息をしている

(2007.2.2)

## 対話

忍び込んでくる冬の大気は  
心地よく肺を冷やす

彼でもなく

彼女でもなく

此処でもなく

彼処でもなく

忍び込んでくる冬の  
大気は  
裸の私を包む

住所でもなく

電話番号でもなく

基本台帳番号でもなく

名前でもなく

忍び込んでくる冬の  
大気は

うたを呼ぶ

私を立ち止ませらせることのできるものは  
多くあるけれど

私を立ち止まらせないようにできるものは  
ただお前のみ

忍び込んでくる冬の  
大気は

——遊んでいる

メジロのつがいが椿を

順番にのぞいてゆく

昨日ものぞいていた

明日ものぞくだろう

忍び込んでくる冬の気は

私に話しかけてくる

(2007.1.9)

愛について

黒く

紅く

白く

黄色く——

けれども

枯葉色の

碧色の

藍色の——

プラスチックな性欲や

雑然とした欲望や——

そんな中に

押し潰されているけれども

少年のときにスケッチした樹

その、ひと葉ひと葉は

ともだちのように、また

いきものたちのように

魚を包む粘膜のような

微生物の繊毛のような

つやつやとした林檎の皮のような

陽射しの臭いのする毛布のような

けれども

肌を刺す冷気のような  
透きとおった水の深さに宿る恐怖のような  
頭上から落下する岩の重量のような

優越という快樂や

抑圧への嫌悪や——

そんなものたちに

蹴飛ばされてしまうけれども

砂浜から望む水平線を

見え隠れする小舟は

波を乗り越えては

陽射しを受けて輝いて

怖く

鋭く

痛く

寒く

けれども



丸く  
やはらかに  
あたたかく——

それらすべてを  
この掌に  
享けている

(2007.2.11)

## 孵化

磯伝いに歩く僕の耳に  
届くときもあれば  
届かないときもある——

それは潮騒なのか  
それとも  
ピアノの単旋律の粒なのか

届くか届かないかの狭間で

僕のうたは目覚め

大気へと溶け出してゆこうとする

僕にはそれを制御することはできない

それとともに

僕自身のうち慄えるような歓びまで蒸発してゆくことも

お前の孵化した後には

僕の中に残されるものは

ただ、凧いだ漆黒の夜の海だけだろう

心地よい疲れが僕を包み込みはじめている

そろそろ一休みしてもよい頃合だ

陽射しに暖められた岩に腰を下ろして

潮溜まりを覗き込むと

ゆらゆらと

イソギンチャクの触手が靡いている

次第に薄れてゆく歎びのずっと彼方に

僕は見る

大気となって漂うお前を

(2007.2.23)

## 無題

小さな紫色の花が咲いている

私はそれを摘もうとする

猫がそれをじっと見つめている

焦茶色の縞模様

雨にぬれた地面と連続して

草むらの影に気配は消されている

瑞々しい紫色の花は

私の手の中で息づき悶えている

見上げると

大きな木の梢の下に居ることを知る  
黒い大きな影が  
草むらへと連続している

目を閉じることが余儀なくさせる

瞬く木洩れ日の鋭利な刃

模倣を拒む者たちの棲む一隅

私はそこを出る

萎れた紫の花を掌にして

遮るもののない空間へ

屹立するビルのガラス窓は

忠実に空を写し

視覚だけを切り出し、灼きつける

お前、摘み取られた紫の花よ

あの窓に映る空が、一体

何を語っているかを教えてくれ

お前が結ぶべき種子は

私が断ち切ってしまった

しかしお前は私に語らなければならぬ  
その目で見たことを  
その耳で聞いたことを  
その五感で知ったことを

(2007.5.26)

## 夏の入口

5月の強い陽射しの中を吹き抜ける爽やかな風を  
僕は身体中で記憶する  
世界そのものが眩しく光に反射する  
痛いほど・・・  
だから新緑は既に濃い緑に濃縮されている

物陰から飛び出したトカゲに注がれる——  
猫の視線には放射のかけらもないけれど  
引き絞られた弓のような緊張が隠れている  
五感をあげて気配を消している

にじり寄り、狙っている

咲き遅れたパンジーは暑熱に色褪せ

埃じみた紫や黄色へと、見る見るうちに焦がされてしまう

それにかわって顔を出し始めたアジサイはまだ

まるで田舎の幼い子供のようなあどけない顔をしている

湿った南からの空気は、まだ届いてはいない

僕は帽子を被っている

(2007.5.26)

若い人

夏の終りを告げる風が砂利浜を舐め

カタカタと窓を鳴らす

眠りの中に浮き沈みする憧れと

乳首をまさぐる指先を震えさせる不安

緑色をくすませる雲の覆いが

深い水の底を映し出す

昨日と今日だけが意味を持つ  
私にとって、明日だけが意味を持つように

さわさわとしたさざなみの足音を  
息をするように吸い込む家々

この深い湾から抜け出すことと  
男を受け入れることとは同義となっている

人がその暮らしの営みを思うこと——  
営々と繰り返されてきたそのこと

森で歌われているさえずりには  
夢を溶かしたり、そこへ別の夢を溶かしたり  
そういう薬効があるという  
若い人よ

(2008.8.17)

## 網

言葉なく

風に這う砂

風紋を見つめ

ハマヒルガオの種子が

枯れ落ちた花の後に実っていることを

改めて知る

風は強いにもかかわらず

波頭は穏やかに岸に寄せている

私は網——

何ものも掬うことのできぬ網

弓なりに長く続く砂浜は

遙か水平線に目をやっている

足元を這う白い砂粒は



時折、目映く明滅する

白い貝殻

背の低い松の列

向かい風に静止するコアジサシ

風の彼方にある空

私は告げられる

「この海の傍で死ぬ」と

私は網——

何もかも掬うことのできぬ網

ただ、風を空しく素通りさせるだけの網

(2007.6.13)

存在

雲の上の空は確かに

地上から見るよりもずっと青く  
雲の上から見下ろす街は確かに  
そこに住んでいた時よりもずっと親しげで

僕は多くのものを置き去りにしてきた  
そして今は  
生きることを憐れんでいる

南風が窓のカーテンを揺らすのも  
母親が洗濯物を乾すのも  
友人たちが暇を持て余しているのも  
今はよく見える

僕が僕であった時よりも  
ずっとよく見える  
僕が僕でありすぎたこと——  
そのことがよくわかる

僕は多くのものを置き去りにしてきた——  
残された者たちに

今は告げたいと思う——  
この景色を

僕は今、ひとりだ

けれども、もはや僕というひとりではない

大気という僕なのです

だから、ひとりではないのです

ああ

地上に生きる者たちよ

僕は新たな使命を負った者である

顫える草

繋がれた掌

打ち寄せる細波

それらを告げ知らせること

あなたがたの純粋な夢の城の周囲に堀をめぐらせ

攻め入ろうとする「演算」を防ぐこと

あなたがたは思い出すだろう

折に触れて見上げるだろう  
自らに備わった五感をあげて  
大気のあることを

(2007.6.17)

### 気動車

沈黙の勝利する

——の  
み

かつ——

隔てられた自由

スタティックで——

それが自由と呼ばれる理由は何か

(車窓の外を舞う雪)

磨耗した意思

造形されるだけの――  
それは結晶に過ぎぬ

受動的な洪水、氾濫

それをかき分ける――  
その自動性

(埋もれた駅標)

排除すること

拒否すること

それを眠りと呼ぶ者が居る

執拗な

饒舌な

秩序

(私は下車する)

(2008.3.8)

## 虚脱の海

浜辺に座り込んだ僕は

遠くの海を

眺めるともなく眺めていた

白く反射する光を身にまとって

その景色は

色という色の全てが透明だった

かつて僕の胸へ輻射していたそのままに

現在

それは還って来ていたのだ

僕の傍らには、なかば砂に身を沈めて

壊れたノートパソコンが

潮風に風化しようとしている

何物かが死に絶えた――

その想いが

世界を虚脱状態で満たしていた

枯渴した夢想の匣へと次々に押し寄せてくる

無数の既製品

誰にとっても都合よく揃えられた――

静かに眠っている者が

再び、そもその初めから目覚め

自由の中に描き始めるのはまだ当分先だろう

僕はここに座り

残りの人生を

まるで北国の者たちが春を待ち焦がれるように  
ただひたすら待つことにしよう

(2008.8.10)

少女

東屋の下に頼杖をつく僕の視線のすぐ先に  
細長い木のベンチに座り

茫漠とした

しかも騒々しい真昼の光に覆われた海原を  
飽かず眺めているお前

白くごつごつとした石垣が

まるで砲台のように突き出ている岬の上で  
僕たちは他人であるかのような

また

親子であるかのような

探り合うようにして

270度の眺望を共有し

お前は柔らかかそうな帽子に手をかける  
時折吹く涼しい海風が

その帽子を私のもとへ運ばぬよう



息苦しきなど微塵も無い

ただ

ほんの少し喉が渴くほどの

そんな

官能的な糸をかすかに引き合うひと時

ため息一つ洩れることもなく

遙か沖合のたゆたいのような

この場所

お前は振り向こうとはしない

何かを待ち受けたまま

僕は頬杖をついたまま

お前の後ろ姿を眺めている

その石垣を超えて飛ばそうとしている――

それを見送り

その代わりに

満たされることを希求する

お前の胸の引出しを温めるべく

(2008.10.4)

恋

ミントの葉をつまみ

その香が桜の花びらのように

はらはらと舞い散る——

そんな大気の中を

ひとつ

またひとつ、と

歩いている気がする

そこにはひとつの瞳がある

ミントの繁みを掻き回し

その香が疾風のように

ひゅうつと通り過ぎる——

そんな果てしの無い小道を

ひとつ

またひとつ、と

たどっている気がする

そこにはひとつの掌がある

その掌から瞳へと

憧れに満ちた僕の体温が

(ふるえを帯びたころとして)

静まっては再び高まる

なだらかな波のように伝わり

うすあおい大気の中へ放射されてゆく

ミントの中を泳ぎ

そのかすかな葉擦れのように

包まれるでもなく

愛撫されるでもなく

ひたすら

寄り添っていたい、と

まどろみ続けている気がする

そこにはただ――

感覚があるばかり

(2008.10.17)

三日月

舌足らずな三日月

僕が見上げるものに

糸を繋ぐ

歩き疲れ

生きていることの、孤立した

証として浮ぶ三日月

父なるもの

母なるもの

その抱擁を微笑する三日月

ぽっつりと

ただひとつ

僕の帰路に浮ぶ三日月

真昼に見渡した海原

結晶が光と交叉し

それらがざわめいているかのような

日常という凶器が

待ち構えている、と

それを通告せぬ三日月

現在という孤独者が

町裏の狭い影で

眠りを食い漁っている

三日月が浮んでいる

何十億年の我々の営みとは関わりなく

我々が持て余してきた時間とは関わりなく

成層圏の遥か向こう

粒子の抜け殻が黒く澱み

感覚という名の離脱を操っている

三日月が浮んでいる

闇に紛れて忍び込む者が居る——

それを見て見ぬふりをしたまま

厚顔無恥な臆病者たちが

訳知り顔で弁解を並べながら

後ろ向きに逃亡する

三日月自身は変わっていない

我々の居るこの星が変わっている

その意味において位置が変わっている

ふらふらとした酔いが

僕の嫌悪感を増幅する

黒く、どこまでも黒く

三日月が浮んでいる

孤独から逃走するために

雑然と置かれた無数の標識に見え隠れして

溶解しはじめたアスファルト

そこに足を沈ませて

僕はよろめき、吐く

三日月が浮んでいる

僕は見上げる

完結の無い別離の沼——

その水面を

(2008.10.17)

## 初秋

細長い谷あい  
を海へ向けて歩く

刈り取られた後の水田に挟まれた街道に  
朱色に染まった蜻蛉が滑空している

それにも増して鮮やかで艶やかに照り映える赤い蕊が

すつくと緑色に伸びる莖束の上で燃えている

(まるで竹林のように見通せる不思議さ)

生き生きとした大気が僕を導き

置いてきぼりにされたこの脚を元気付ける

ありのままの美しい季節が五感を包み

ありのままの哀しみを撫でてゆく

精密さと偶然性が時間とともに醸成した

造形であり、同時に抽象であるもの

(失われたものが残した空洞に集まってくる)

穏やかな死へと続くなだらかな道をそれることなく

計算され尽くした経路を守り抜くのは所詮、お前の柄じゃない

夜は、輾転反側、眠りを食い破り

昼は、あれやこれやと行ったり来たりかどうか巡り



今日はそのためのプロローグの筈だが  
天気は滑稽なほど、あっけらかんとした快晴だ

(細胞が勝手気ままに浮き立ち、伝染してゆく)

その街道沿いにあるすべてのものが  
その背後に海を嗅ぎ、肩を抱かれています

営まれている暮らし、紡がれる時間

放浪者なんぞにはおかまいなしに流れるもの

稜線が背伸びする先を丹念にたどり

僕は空へと辿り着き、吸い込まれてゆく

(解き放たれた心が溶け出した涙)

静かに頷かれ、許された絶望が

下り坂の先に姿を見せた海へと拡がってゆく

彼岸から一列、また一列と寄せてくるなだらかな波が  
巖の上にある、古びた祠が無言で迎えている

新たな孤独が、寂寥感のない新たな孤独が  
生命の漠とした行方を指し示している

滅亡の先に残る、ただひとつの怖れが  
降り注ぐ陽の光に薄められて蒸発してゆく

海原を遠く渡ってきた風が  
ふたたびどこかへと渡ってゆく

人はこうして立ち去るものか  
その風に別れを告げ

(僕を待っている、とも言うことができる、今では)

(2008.11.21)

断片的な不協和音が軋む

それを包み込もうとする青く透けた不安  
それがふらふらと危うく揺れている

私はそれを支えようとする  
飛び交う羽虫を振り払う代わりに

溶解した氷の青さそのままの海  
頑なに寡黙な海

対比でしか存在意義を見出せぬ己か  
それとも遥か水平線の彼方と対峙する己か

この肉体の中に毒づくものは  
産み落とされた受精卵の影

美と対極にある妖しげな生命

青臭い水溶液で構成された生命

苦悶の呻きとも

快樂の喘ぎとも

己という部屋の隅に追い詰められ

憎悪の中に閉じ込められた涙

それらを解き放つ者は誰なのか

己自身か、それとも——死か

薄い陽射しが円い石浜に降り

魅惑的な撫で方をする

断片的な不協和音が軋む

私はそれに耳をそばだてる

怯えながら

(2008.11.13)

## 椅子

日差しの射し込む広々とした部屋  
そこにあるのは、ただ一脚の椅子

直線のみで構成された世界

その交点へと視線が吸い込まれてゆく——そのとき  
影が振り向く

鮮明なまま薄められた影が

形の無い自負が誕生する

その故にこの胸の奥に

消えることなく留まるであろう自負が——

積み重ねられ畳まれてきたあらゆる体験をも

推進力としてしがみついていたあらゆる論理をも

一瞬で蒸発させた、正にその時空にて

昆虫の翅はねのように透きとおった意思が

大気を抱く

あらゆる予感が交錯するが、しかし

静かに閉じられた視線を  
それでいて開かれた眼差しを  
そよとも揺らすことはできぬ

見たこともなく  
聞いたこともなく  
触れたこともない  
そのような慄えが準備される

共鳴する鼓動が呼びかけ合うのが聞こえる

私は椅子に腰掛ける  
(2008.11.18)  
徒歩

とりわけて晴れの日が少ない、  
とりわけて心躍る時が少ない、  
というわけではない、  
というわけではない

\*

朝露に濡れた板道を森へ森へと歩いて  
私は自らの生命を分け与えることを想っている

寂とした、凜とした、朝の影の色、その濃さ  
平坦な草原から谷間の奥へと続く小徑<sup>こみち</sup>

ああ、蜜を求めて群がる蜂たちは  
どこからともなく季節を呼び寄せてくる

かつて、生命の価値を明度によってのみ測り  
利益や効率のみを知恵に追求させていた——  
そして、その挙句に、変質した老廃物に埋れ  
孤独や絶望を罪悪として恐怖し  
ひたすら己の尻尾を追いかけ回していた

あらゆる者たちが無言で寄与しているように見え  
あらゆる者たちが、同時に無関心であるようにも見える

足下に咲く点々とした花々は、吹きだした風に  
小刻みにふるえ、賑やかにさんざめいている

森の彼方に見える山並みは空の青さを映し  
壁となって季節風から水を得る

都市の中に自律を見出すことは難しい  
依存の連環という脆さと同時に  
それ故に安定であるとの錯覚  
搾取していることを意識することなく  
枯渴の危険を感じることもない

不安を孕んだ無風の安逸の中から這い出し  
規格化された無数の商品の陳列棚を蹴飛ばし――

無防備な蛹として大気に身を預け  
再生するために自我を溶解させる

この身に蓄えられた力と、そして知  
それのみをもって創造すること――

退化してゆく生命機能を守るため



次々と防御システムを増殖させ

同時に生命体の生命体たる根源を啜らせてやる

その息苦しさに喘ぐ者は

生命そのものを残忍に狙う野獣となるのだ

水辺に憩っていた者たちが一斉に飛び立つ

人々、という輪は、ここにはない、と知る

聞こえている葉擦れとは少し違う声が

目を閉じると、遙か彼方から届く

私はそれを胸の奥深くへと導き、刻み込む

それ故に切り拓かなければならないものを知っている

自己という対岸へ渡るため

売り渡した意思に媚を売る

何度も、何度も、何度でも

法外な利子の付いた借用書を書き続ける

血走った目で

たとえそれが灼熱の高温であるとしても  
手に取らなければならぬ

この身を貫き通すわななきが意味するもの——  
お前はそれを知ることなどできないのだ

森の中に射し込む陽光の、散乱することのない透明さ  
独りではない、と私をして眩かせる透明さ

事実の殻だけを積み上げ

それをひたすら解析し

未来を導き出す

その背後に追いやられたもの

哀れ、それが現在の意思の姿

私が戻らなければならぬのは明白だ

あの森を越え、山脈を超え、そして川を下る

冷ややかで、しかも気前のよいお前たち……  
そこから多くのものを得ることだろう

しかし、いかにこの腕の中に抱きしめても  
どのようにしても、奪い去られてゆく――

そのことを哀しむことはない  
が、しかし、とめどなく涙が溢れてくる

「何のために、そして、何故に」  
そのような問いは無意味なのだから

\*

とりわけて晴れの日が少ない、というわけではない  
とりわけて心躍る時が少ない、というわけではない  
ただ、今日は抜けるような青空が  
私を吸い寄せてゆく

(2009.1.17)

悲歌

テトラポッドの間から打ち寄せる波

お前の苦悶の心臓

じっと耐え、おの慄く心臓

振り返ることのおぞましき

きらきらと照り映える海面

その鋭いガラスの切り口に慄きうずくまる

陽光に無残に曝され

叫びをも押し殺す傷口を

黒っぽい砂を敷きつめた汀に追い詰めてゆく

何気なく雲を浮ばせる白い空が

眩暈を起こさせ、攻め寄せてくる

あたかも超新星の衝撃波のように

お前の手は僕の袖を強く掴む

引きちぎれるかと思われるほど強く

呆然と立ち尽くす僕の袖を

狂った時間軸にお前は嘔吐する

嘔吐するためだけに食された全てを  
そして、それを波がさらってゆく

キリストの十字架

お前の十字架

ふたつの重さは今や等しい

お前が神話となる日はいつのことか

凶器として生まれ変わる日は

ああ、いつのことか

けれど、今や記されるものは言葉ではない

変換された、近似的事実

まるごと放り出された近似的事実

春に向けて準備を始めた陽光

北風は何物かを消し払うのに躍起となっている

僕はお前の背中をさする

浜の砂は吸い込み、呑み込む

ねっとりと碎ける波の音も

お前のすすり泣きも

(2009.2.14)

## 舵

現在を詠うことを

僕は恐れていたのかもしれない

刻々と移動する客船の中を世界と呼ぶ――

そのような僕自身について詠うことを

恐れていたのかもしれない

船べりから望む青い海は

この船を浮かべるだけのもので

それ以上のなにもものでもない、と

詠うことを怖れてきた僕は  
その虚言にしがみついていた

この船の舵をとる者が見る海図に  
陸の望めぬ進路を書き入れたのは  
紛れもないこの僕だ

快適な眠りのみを求めて  
揺られつづけるこの僕自身だ

甲板に出て見回しても

ただ、うねるような海原があるだけだ  
しかし、本当にそれだけなのか

海図を今一度見てみるがいい  
風の匂いを嗅いでみるがいい

太陽の運行

そして星の運行  
それらを注視する――

海図に点々と記された航跡  
すでに何度も同じ地点を通っている

引出しの中に隠れているもう一枚

それを並べてみる——

この方向に陸がある

おぞましい陸がある

本当におぞましいものなのか——

僕は舵を切る

海はうねりを増し

舳先が空へ

そして波底へと上下し

僕はもみくちやにされる

黒雲が嵐を連れて来る

疲弊し、磨耗した五感が

再び悲鳴をあげ

虚偽の永遠を引き裂き

死へと続く引き綱を掴む

\*



燃えるような喉の渴きに

目が覚めたとき

熱く黄色い輻射が甲板を炙っていた

平板な群青色の海面には

微かな風しかなかった

船べりに手を掛け

彼方を見回すと

銀色に光るものが見えた

陸、だった――

僕は舵を切る

じりじりと近づくにつれて

阿鼻叫喚に満ちたような高い軋りと

低周波の呻きのような唸りが

次第にどす黒さを増してゆく水の上を

まるで多足のムカデが這うようにして渡ってくる

無数の縄が投げられ

それを船に結わえ付けると  
船はぐいぐいと引き寄せられてゆき  
あっといふ間に接岸は終了し  
渡り廊下が船端に掛けられた

ふらつくように僕は船を下り  
僕は人工物の林へと歩き出した  
予測のもとに創造された林  
明瞭で、疑問の余地のない林  
人々はそこで暖を取っていた

ふと振り返ると

今しも船が沈められるところだった

(これで僕も、歴史の一部たる現在の一員だ・・・)

(2009.2.28)

## 夕餉の支度前

これまで何を暮らしてきたか——  
そんなことを想いながら

たっぷりクリームの混じった春の陽の差し込む居間で  
ガラス窓越しに見える雲を独り眺めている

いちにち、いちにち、というものは

鮮やかになったり

色褪せ、薄れたり

常に移ろい変化していくもの

私には幸福というものなど必要ではない

ましてや、いつもいつもはしゃいでいたら

いつもいつもはしゃいでいなければならなくなる

ただ、時おり喜べるような出来事があったらいい

戸棚の中にあるコップやお皿は眠っている

夕方になったらまた起き出してもらおうけれど

今は眠っていてもかまわないわね

ああ、あの人は今ごろどうしているかしら

今日はまだ何も起きてはいない

昨日も特段のことは起きなかった

明日は雨が降るらしい

いろいろなところにまるい滴が生まれるのでしょう

あの人はいつも、おどおどと気にしているのよ

私がつまらない毎日を送っているのじゃないかって

ばかね、あなたは・・・

私には幸福というものなど必要ないのに

時おり、さーっ、と影が通り過ぎるように

寒々とした寂しさがすっぽりと肩を包むときもある

そんなときには、人間ひとであることを棄てて

天道虫のようにベランダに出て雲を眺めています

これまでに 何を暮らしてきたか――

何も、とりたててこれといったものはなかった

たぶん遠からず、子供も授かるのだろう

その営みにかけるあの人の情熱には微笑さえしてしまう

何者かに、あるいは誰かに必要とされていることの確信

それはそんなに重要なことではない気がする

私自身が生きている抛り所が何であるかの確認  
それもそんなに重要なことではない気がする

今日、何を歩いたか

そして明日、歩く場所があるか

そのことだけが愛しい

そのことだけを想っている

食器棚のガラスに映る私が誰なのか

それさえ蒸発してゆくような――

そんな一日を歩いてゆくこと

そのことだけを想っている

ああ、あの人は今ごろ何をしているのかしら

幸福であることを確かにするために

きつと額に汗して己を励ましているに違いない

それがあの人の喜びであり続けられればそれでいい

これまでに何を暮らしてきたか——

そんなことを想いながら

たっぷりクリームの混じった春の陽の差し込む居間から  
私は、ぽかぽかとして立ち上がる

(2009.3.30)

## 暮らし

からからと笑う——

その自分の顔やら

しゃれた骨董の家具やらを映す

つるつるに磨かれた床

静かなので

小鳥のさえずりや

風にそよぐ葉擦れや

人声以外の全てが豊かだ

流れるものは水や空気であって

時間ではないのです

思い出されるのは何ヶ月も前のことであって  
昨日や、先週のことではないのです

今は皆、出かけているので

もうずっと、こんなふうに過している——  
暮らしというものを感じるには

こんなふうでなければならぬのですね

つつつ、つつつ、と

涙が流れてくるのは

哀しいときではない、と知りました

心が晴れ晴れとなる時なのだ、と知りました

広い居間のフランス窓の傍に立ち

かつて居た街へ、うねうねと通じる道を眺め

ああ、今日もまた誰も訪れず

そしてまた僕は旅立たなかった、と呟くのです

この手首に残る傷跡——

それも既に微かなものとなって

消えかかり

僕自身の生命の一部に過ぎなくなっている

毎日は、ほんの少しずつ

ほんの僅かずつ異なっており

新しく生まれてくるものなものでした

そこに、現在は暮らしているのです

夕日が沈みかかる頃

からからと笑ってみると

オレンジ色のリボンのような陽光が

部屋の中の灯りを点してくれました

今は皆、出かけているので

もうずっと、こんなふうに過している——  
暮らしというものを感じるには



こんなふうでなければならぬのですね

(こんなふうに過すことができるとは・・・)

(2009.3.4)

## Works

育て上げた彼女を見つめながら

生温かい陽光の

はるかな遠さ

空しさの

肌触り

いかに美しくとも

いかに愛らしくとも

蒸発した旋律にあわせ

目の前で舞う彼女の地平は

この私の地平ではない

ああ大気よ

この私を包んでいながら

お前の眼差しは

彼女に向けて閉ざされ

どこまでも私と交わらない

私は口づける

冷えきった彼女の唇に

風になびく髪を撫で

ほそい指に指をからませ

背中に額を押し付ける

ああ

哀しくなどあるものか

この素足を撫でてゆく波の泡

きらきらと輝く砂混じりの波

私はこの世界に留まろう

もし私が生を全うしたその時には

きつと

彼女が私の墓標に刻んでくれることだろう

「果てしの無い後ずさりであり

消え去ることを受け入れた者

そして私の生みの親」

(2009.3.17)

## 春

生温かい南風にふくらんでゆく

幾重にも畳まれた花びらが目を覚まし

抑圧された患者の肌からじわじわと沁み込んでゆく

やみくもに変換された言語の列

みすぼらしい肉体が裝飾されてゆく

その内側で膨れてゆく精液の船溜まり

ブーメランのように弧を描いて飛び回る  
挑みかかるような、なまめかしい肌触りの音

陽光は、とりわけ黄色いものを輝かせ

地底の奥底深く埋めたはずのものを浮き出す

滴り落ちることをためらう真っ赤な液体

花粉に覆われた埃っぽい地面がお前を拒んでいる

時間  
不在

指先が勝手に添えられる  
温あたたかいものへと

減数分裂

春に息絶える者

既に狂気は消えている

瞑想へ、ひたすら瞑想へと逃亡した

やがて、それらのうねうねとした  
あるいは茫茫とした軌跡は蒸発するだろう

満開の、薄桃色の木々、また木々  
その梢と梢の重なりあう下で

(2009.3.22)

## 名宛人

その昼の波のざわめきは  
どろりとして

まどろむような  
まるでうわ言のような響き

風化した後悔が目覚まし  
寝返りを打つ

遠くへ投げ棄てた恋を  
口ずさんでしまう時

(無数の言葉が飛び交う中に、静かに、ひたすら静かに綴る書簡は投函される  
ことはなく

配達夫が配っているものといえ、  
広告、広告、そして製品、また製品のみ)

風に掃き溜められた雲が

どんよりと連なり

次第に陽光を遮り

ふくらみかけた蕾を冷やす

吹きさらしの砂浜にて

掌を開いては

拳を握り

己が生を確かめる

ああ、書き認めたい

名宛人は

現在に生きる者達を住処とした

祈り、様

私はあなたの虜

ああ、あなたを愛撫したい

あなたは私の愛しい人

あなたは私の憧れ

瞼を閉じ

来るべき現在の消滅を

ひたすら待ち

死を眠る者よ

前略——

(2009.3.23)

早春

疲労の中にめり込んでゆく

細い枝々が ゆうらり、と  
また、ゆうらり、と交叉する

そこに見開かれた微かな花々

透明ではない薄紙

ひかりを呼吸する薄紙

それらを愛で

そして

沈み落ちてゆく

これから始められる交合

これから始められる死滅

その同義であることを謳歌する花々

ある者は意思、という

しかし

ある者はたくらみ、という

限りなくほそい毛細血管



あるかなきかのようなそれらを透けた  
肌

あわあわとした

触れたい、というそよぎ

ひとしづくの媚薬

その樹木のはるか向こうから

その枝垂れたすぐ先へと流れる川

みず

力なく風にそよぐ腕を取り

その意外な重さに

するりと抜け落ちる想い

哀しみを増幅する何者も居ない

その故に

涙は止まることを意思しない

ひらひらとはためく花弁

それらに歌を強いる者こそ  
我を生かしむる者

(2009.3.30)

### 稜線

不器用であるという、たったそれだけで  
祈りさえ許さぬ嘲笑の視線が交錯する中から  
色彩のみに身を委ねて己自身を塗り潰し  
単なる機能そのものと化した都市の中から  
私はお前を無理やり連れ出した

お前はひたすら怯えた眼差しで身を縮ませ  
引き裂かれた己が片割れの警告のままに  
本能的な防御の海深く潜ってゆく  
その時に滲み出る涙は

何も溶かし込まれていない、ただの無機的な水

支配を望まぬ筈の予言者が祭り上げられた時代の  
ひたすら燻し出され裁かれる、新たな予言者たちのように  
お前もまた不穩分子として唾を吐きかけられ  
従順さの消費に比例して生み出される廃棄物、すなわち  
恥辱や、酸化した惨めさの、黙認された処分場所となる

怯え、慄え、膝を抱えてうづくまる

そんなお前にしてやれる何があるというのか

死か、逃亡か、消去か、それとも盲目の隷属か

今や憤怒のかたまりとなっている私をさえ

お前が恐怖するのも無理からぬこと

今の私たちに帰る場所などあるはずもない

来日も来日も、ひたすら鉄路を辿る――

この旅程を逃亡と嘲る者たちなど放っておけばいい

絶望的に、痙攣するような息に苦しむお前

胸引き裂かれるようなその姿を、私は冷徹に正視する

車窓を過ぎる風景は、日に日に変わってゆく

広葉樹は減り、針葉樹が増えてゆき

今はもはや、樹木そのものがまばらとなり  
丈の低い灌木や、苔むす湿地が広がるばかり  
お前は、そのさまに狂喜する私を怪訝な目で見る

ああ、見るがいい、これが孤独というものの風景だ

お前がこれまで恐怖してきたものは、それは孤独ではない  
己自身を抹殺し、管理された安穩というまやかしに身を委ね  
我々の手を離れてしまったシステムを妄信する——  
そのような者たちが身に着けている甲冑に過ぎないのだ

私たちは、とある停車場で列車を降りる——

さあ、ここからは自らの足で先に進むのだ

あの低く垂れ込めた雲を見るがいい

あの者たちが我々を出迎えてくれているけれど、しばしの別れだ  
さあ、薄暗い闇の支配する森へ分け入ろう

既にして、お前の怖れるものなど何ひとつ無い

数週間前は、死をも希っていたお前に、何を恐れるものがあるろう  
ああ、今のお前の顔には、空腹と、疲労とが支配する中であって  
穏やかな呼吸と、目覚め始めた五感の息吹があるではないか

さあ、今こそ己自身を取り返すがいい

森の歌が湧き出る泉の元を訪ねる道々

我々なんぞにはお構いなしに花開く植物たち

お前を緊縛していた透明な綱は解かれてゆく

斑模様を揺らめかせる木洩れ日によって

愛に満ち満ちた静寂に戸惑うお前の胸を穏やかに開く

数日間、上り下りを繰り返すと、私たちは見出した

葉末から滴り落ちる、一滴の朝露のように

大気から生れ落ちた、新たな生命であり、同時に

地面に降り、地中へと沁み込んで希薄化する存在としての

集合、交換、分散し、絶えず変転する己を

森を抜けた山稜に立つ私たちを

吸い込まれるような静寂が包み込み

恐怖にも似た巨大な響きがたなびいて

お前は私の手を慄えながら強く握り

息を荒らげては、また息を呑む

あの稜線を超えてゆく白い霧の流れを前にして  
何を恥じることがあろう

これまでお前を脅かしてきた比較の対象など  
これらの懐深い世界の前では全く無意味であり  
取るに足らぬほど矮小であることを、お前は知るのだ

遠くに見えるものを引き寄せるように

雲の彼方に広がる山脈を越えて

ささくれ立ったお前の心の肌は渴望する

敵意に閉ざされた部屋の無音の闇ではなく

広がりとお奥行きに満ちた深い静寂を

お前はいま、知った

我らに与えられたものなど何ひとつない——

その中にこそ、すべてが潜んでいる、と

痩せこけたお前の肉体が拒否してきたもの——

ここには、何ひとつそれらが存在しない

耳を塞いでいたメディアのイヤホンを外し

お前は耳を澄ます

目を閉じ込めていた小さな画面を投げ棄て  
お前は視線を投げ飛ばす

見る間に全ての感覚が開かれてゆくのを感ずるがいい

ああ、湧き立ち上がる五感の慄え

この世界全てに向けて、大声で泣き叫ぶがいい

萎えきった脚が立つことを熱望している

それを支え切り、耐え切るがいい

それこそが、お前自身の生命の力だ

独りであることの意味とは何か

それを、この大気は語ってくれるであろう

同時に、1人でないことの意味とは何か

それを、私たちの掌が語り始めるであろう

五感の全てをあげて、生きるがいい

そしていつの日か、あの都会へ戻るのだ

何ものからも自由な創造者として

そして同時に、異端者であり、かつ破壊者として

都市が身を委ね、信奉している制御システムを

自動生成され、自動繁殖する企みを笑い飛ばしに戻るのだ

(2009.4.26)

## 初夏

生せいのなまなましい手触りは薄れているのに  
その重量だけが僕を包んでいるのは

午前の陽光にさんざめく湖面のたゆたいの技わざか

あらゆる事象が無価値であり、同時に

あらゆる事物が僕と同類であると感ずるのは

花を落とした薄緑の木々がたてるざわめきの故か

何ひとつ言葉で語ることできぬバラッドは

日々の暮らしの、ずっと向こうから

グレーの扉を目の前にした僕の足下へと沁み込んでゆく



これまでの時間  
これからの時間

その隔たりは消え、等価となる——

それなのに未だに僕は、陳腐であるか、それとも  
ひらひらとした薄っぺらな意味しか持たないか——  
そんなちっぽけな差異の周りをうろうろと歩き回る

哀しみのひと欠片も無く、穏やかな午後であっても  
そよそよとした風に、胸の痛みをおぼえる——  
おそらくは、これこそがあらゆる生そのものの宿命なのだ

理知的な遊戯が織り成す自由な旋律の中にさえ  
ちゃっかりと潜み込む陰影たちのように  
それは、なくてはならぬものなのに違いない

僕は手をかざす——

すると、何者かがその掌を通り抜けてゆく

ああ、この身を蝕みつつある、死臭にも似た毒素が何だろう

ついさつきまで想い描いていた惨めな自画像こそが  
この世界を覆い尽くし、虚ろな笑いをばら撒いている瘴気——  
その存在を映し出している鏡そのものじゃないか

元来、測定されるものに過ぎなかった数量——  
その数量自体が自在に集合、変容することによって  
自ら存在を誇示し、世界を支配する

タン、ドゥン、タン、ドゥン  
自慰に過ぎない舞曲は溢れるほど提供される  
そのことによってのみ人類は退化してゆく

地上を覆いつくした創造物——  
永遠と未来を約束されていたはずのそれらは  
早くも疲弊し、色褪せ、黒黴菌糸の進入を許している

食い破られた蛹から這い出る偽善の手足  
どうしてこんな詩<sup>うた</sup>をうたわねばならないのか  
どうして僕はいつもこうなんだ

しかし、雲よ、許したまえ

お前の居る、抜けるような青い空とは対極にある——  
光の届かぬ深海の奥底にも生命は宿っている

破壊という名の創造が許されているならば

この僕には、破壊された欠片を拾い集め  
再生することを許せ

手をかざす——

傷つき、疲れた細胞の奥から

滲み、盛り上がる涙に影を落とすため

芽吹き出された若葉たちを透かせる陽光と

それをざわめかせる東寄りの風は

たゆたう時間が僕の許へ立ち寄ることを許す

生のなまなましい手触りはもう消えかけている——

けれども、その代わりに涼しく頬を撫でる風が僕の中を通り過ぎ

同化された大気として包まれている——

そのような生の肌触りが確かとなつてゆく

(2009.9.12)

佳日の散歩

冷たい風が木々の葉を大きく揺らし  
眩しく輝く陽射しをあちこちに乱反射させている  
アスファルトで舗装された道を歩いてゆく  
崖下に見える線路を電車が逃げてゆく  
ドップラー効果で低くなった警笛とともに――

「どこへ？」 「群衆の中へ、忘我の中へ」

「あなたは？」 「自己の中へ」

言った瞬間に、その言葉が一目散に逃げ去っていった  
すると君は腹を抱えて笑いころげる

「大嘘つき・・・」

道端に生える雑草たちの名を呟いてみる  
ナズナ、ジシバリ、カタバミ・・・

庭先に堂々と居場所を与えられた  
パンジーやフリージアなどと変わりはない  
僕は先へ先へと歩いてゆく

この風景と対話することは、一種の交易だったけれど  
今や、その交易そのものが途絶えようとしている  
廃墟と化してゆく、街道の宿場町、さらには港町  
単なる維持や補修ならしない方がいい  
見捨てられ、朽ちるままにしておきたいものだ

丘の下には水を湛え、きらきらと光る条里が、  
たらふく肥料を食わされた腹を抱え

だらだらと涎をたらしながら  
収奪者を受け容れる、その時を待っている  
こんな美しさに見惚れたことなんて一度とてない

「まあ、なんて人でしよう、貴方という人は」

「魅力がなくなれば棄てる——当然のことです」

「でも、棄てるものがなくなったら？」

「どうしたらいいだろう・・・」

「その時のために種を実らすのね」

さくっ、さくっ、という足音とともに

僕たちは絡ませる――

浮き浮きとした心と、5本ずつの指を

その肌触りと、お節介な風の愛撫は

君の言う「種」への想いを膨らませてゆく

(2004.4.25～2009.9.20)

## マリア

夏の訪れを予感させる雲と海風が

あなたが握りつぶそうとしている思い出を再び息づかせる

絶望的なまでに磨耗し、擦り切れ、怯え切った自己

僕はただ道化師となるほかはなく

ひたひたと砂浜をなめる海水のようにつかず離れず――

その眼差しは、ひたすら合わせ鏡の奥へと吸い込まれてゆく  
一つ目の像の歪みは、二つ目の像の歪みへと  
二つ目の像の歪みは、更に三つ目の像の歪みへと  
そして更に四つ目の像の歪みへと  
次々と譲り渡されてゆく

体験の届かぬ理知

感覚を拒否した数列

そのような干からびた創造に狂わされ  
置いてきぼりにされた痛みを取り込み宿すこと——  
あなたを置き去りにした者たちの「未来」というもの・・・

夢魔に取り憑かれたアルゴリズム

権威主義の旗に引き寄せられる論理

それらがあなたにとっての精子となり

あなたは孤独の中で受胎を繰り返し

呻き、悶え、産み続けることを強いられる

(そこからあなたを力づくで引きずり出すことが  
果たして適切な友情と言えるのであろうか  
)

鏡のような冷え冷えとした雲が拡がってゆく  
それに吸い寄せられるようにざわめく波頭  
その中でまたひとり生まれ出る者——  
僕はそれを育て上げねばならない  
受胎と分娩のみに狂うあなたの傍で・・・

(2009.9.21)

## 駅

ここで降りる

するするとホームに到着する電車の音

そこから降りてくる人々のランダムな靴音

私、は居ない

私たちが居る



理由のない涙こそは  
生きることの恍惚の証

空疎で、だけれども透明  
そこから滲み出てくる次の一瞬

まるで死の向こう側に居るかのような  
そこから眺めているような——生の時間

贅沢にこぼれ落ち  
そして流れてゆく

道、ではなく

2本のレールへと流れてゆく

そこへ吸い込まれてゆくもの  
まるで澄んだ川の水のような

美しい銀色のレール  
それに従うことの、更なる美

ああ、また電車が到着する

2本のレールに乗って滑るように

その下へと吸い込まれてゆく  
そこへと倒れこむことの恍惚

ここで降りる

(2009.11.5)

朝

万両の赤い実が鮮やかに、鈴なりになっている  
昨晚の雨は木々の梢に透明な滴を実らせた

漆塗りの椀に盛られた大根、里芋、油揚げ  
真っ白なご飯に乗せられた昆布の佃煮

本日は何の予定もなく  
だから蒲団を干すことにした

薄い灰色をした影が固定されている

風は木々の間ではなく、その影の間を吹いている

泡の中から生まれた微生物が  
くるりくるりと大気の中を泳ぐ

ためらいがちに鍵盤に乗せた指が奏でる一音が  
静止した冬枯れの風景を薄膜のように包む

旋律というものは邪魔なだけであって  
私自身もまた、質量のない点であればいい

本日は快晴なり

気温10度

(2009.12.6)